



岩波文庫

32-004-6

杜 詩

第六冊

鈴木虎雄 註  
黒川洋一 訳

岩波書店

と 詩 第六冊 [全8冊]  
社 し

---

1966年2月16日 第1刷発行  
2005年2月22日 第10刷発行

訳注者 すずき とら お 鈴木虎雄 くろかわ よういち 黒川洋一

発行者 山口昭男

発行所 株式会社 岩波書店  
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111  
文庫編集部 03-5210-4051  
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・精興社 製本・中永製本

---

ISBN 4-00-320046-2

Printed in Japan

岩波文庫

32-004-6

杜 詩

第六冊

鈴木虎雄 註  
黒川洋一 訳

岩波書店



## 目次

居を夔州に移さんとして作る	九
漫成一首	一〇
客堂	一一
白帝城に上る	一六
白帝城に上る 二首(うち一首)	一七
白帝城の最高楼	一九
武侯の廟	二二
八陣の図	二三
灩澦堆	二四
老病	二五
鄭南を憶う	二六
夔州の歌 十絶句(うち五首)	二六
牽牛織女	三三
雨 二首(うち一首)	三七
江上	四〇

返照 ..... 四

殿中楊監張旭が草書圖を示さる ..... 四

高荳を種う并びに序 ..... 四

白帝 ..... 五

黄草 ..... 五

先主の廟に謁す ..... 五

古柏行 ..... 五

諸將五首 ..... 五

八哀詩 ..... 七

贈司空王公思礼 ..... 七

故の司徒李公光弼 ..... 八

贈左僕射鄭国公嚴公武 ..... 九

贈太子太師汝陽郡王璵 ..... 九

贈秘書監江夏の李公邕 ..... 一〇

故秘書少監武功の蘇公源明 ..... 一〇

故の著作郎・貶台州司戸・滎陽の鄭公虔 ..... 一一

故の右僕射・相国・曲江の張公九齡 ..... 一一

李八秘書に贈り別る三十韻 ..... 一四

中夜	.....	一五
中宵	.....	一五
夜	.....	一五
草閣	.....	一六〇
江辺の閣に宿す	.....	一六一
吹笛	.....	一六一
西閣二首(うち一首)	.....	一六四
月	.....	一六六
第五弟豊、独り江左に在り、近三四載、寂として消息なし、 使いを覓めて此を寄す二首	.....	一六八
楊氏の歌を聴く	.....	一七一
秋風二首	.....	一七三
秋興八首	.....	一七六
古跡に詠懐す五首	.....	一九六
韓諫議注に寄す	.....	二一〇
解悶十二首(うち五首)	.....	二二五
洞房	.....	二三三
宿昔	.....	二三四



杜

詩

第六冊



移居夔州作 (居を夔州に移さんとして作る)

雲安からひきうつって夔州の方へゆこうとしたときの詩。大暦元年春晚、雲安にあっての作。

伏枕雲安縣 遷居白帝城

枕に伏す雲安縣 居を遷す白帝城

春知催柳別 江與放船清

春は知る柳を催して別れしむるを 江は放船の与に清し

農事聞人説 山光見鳥情

農事人の説くを聞く 山光鳥情を見る

禹功饒斷石 且就土微平

禹功斷石饒し 且就かん土の微平なるに

○移居 いばしよをうつす。○夔州 今の四川省夔州府奉節県治、雲安の下流二百四十三支那里にある。○白帝城 奉節県の東にある、前漢の末、公孫述が築いた城である。○催柳別 柳色をうながして人をして別れることができるようにさせる。人と別れるときは柳条を折り、それを輪にして記念とする習俗がある。○与「為に」の意。○放船 ふねを江流にはなち出す。○農事二句 夔州の事を予想している。○鳥情 鳥の喜ぶところ。○禹功 禹の疏鑿のてがら。○饒 多い。○就 こちらからそこへよりつく。○土微平 すこしい

自分は雲安県で病の枕に伏していたがこんど夔州の白帝城の方へ住居をうつそうとおもう。春  
げしきは柳の芽をださせて別れの記念物をつくらせるようにしていることがわかるし、江の水も  
自分の船出のために清んでくれているようだ。あちらでは農事ができると人のはなしにきくし、  
山の様子はさだめしよろこんでいる鳥のころをもうかがいうるものがあるであろう。峡中では  
禹の疏鑿のおかげできれぎれの石が多いのでこまるが、これからまずすこし平らな地面のあると  
ころへよりつこうとおもうのである。

漫 成一首（漫成 一首）

雲安より夔州に向かつて江をくだる際にどこかで船がかりしたおりふとよんだ詩。大暦元年春  
晩の作。

江月去人只數尺 江月人を去ること只だ數尺

風燈照夜欲三更 風燈夜を照らして三更ならんと欲す

沙頭宿鷺聯拳靜 沙頭の宿鷺は聯拳靜かに

船尾跳魚撥刺鳴 船尾の跳魚は撥刺として鳴る。

○漫成 ふとできたこと。○去人 去は離れることをいう。○三更 夜を五分して一分が一更である、三更は夜半をいう。○聯拳 仇注に群聚のさまとされているが、ただ集まるのではなくして鷺の一本脚が多くつらなるさまをいうのであろう。○撥刺 跳躍の声をいう、びちびちというおと。

江にのぞんだ月が我我からたった二三尺はなれてみえる。風にあおられる燈は夜のくらがりを照らして夜半になりかけている。沙べりに宿っている鷺どもは静かにこぶしをならべて立っているし、船尾の方ではびちびち魚のはねるおとがする。

客 堂 (客 堂)

夔州の寓居において感ずる所をのべた詩。大暦元年春晚、夔州にあつての作。

憶昨離少城 而今異楚蜀

憶う昨少城を離れしことを 而今楚蜀異なり。

捨舟復深山 窅窅一林麓

舟を捨つれば復た深山 窅窅たり一林麓

棲泊雲安縣 消中内相毒

棲泊す雲安縣 消中内相毒す

舊疾甘載來 衰年得無〔弱〕足

旧疾甘んじて載せ來たる 衰年〔弱〕足を得

死爲殊方鬼 頭白免短促

死して殊方の鬼と為るも 頭白短促を免る

老馬終望雲 南雁意在北

別家長兒女 欲起慚筋力』

客堂序節改 具物對羈束

石暄蕨芽紫 渚秀蘆笋綠

巴鶯紛未稀 微麥早向熟

悠悠日動江 漠漠春辭木』

臺郎選才俊 自顧亦已極

前輩聲名人 埋沒何所得

居然縮章絨 受性本幽獨

平生憩息地 必種數竿竹

事業只濁醪 營葺但草屋』

上公有記者 累奏資薄祿

主憂豈濟時 身遠彌曠職

修文廟算正 獻可天衢直

尙想趨朝廷 毫髮裨社稷

形骸今若是 進退委行色』

老馬終に雲を望む 南雁意北に在り

家に別れしより兒女長ず 起きんと欲するも筋力に慚ず』

客堂序節改まる 具物羈束に對す

石暄かにして蕨芽紫に 渚に秀でて蘆笋綠なり

巴鶯紛として未だ稀ならず 微麥早く熟するに向こう

悠悠日江に動き 漠漠春木を辞す』

台郎才俊を選ぶ 自ら顧るに亦た已に極まれり

前輩声名人の 埋没何の得る所ぞ

居然章絨を縮ぬ 受性本幽独なり

平生憩息の地 必ず數竿の竹を種う

事業只だ濁醪 營葺但だ草屋』

上公記する者有り 累奏せられて薄祿に資る

主憂うるも豈に時を濟わんや 身遠くして彌曠職を曠しう

す。

修文廟算正しく 獻可天衢直し

尙お想う朝廷に趨して 毫髮社稷を裨せんことを

形骸今是の若し 進退行色に委す』

○客堂 客寓しておるさしき、夔州にあっての寓居をいう。○少城 成都大城の西の城、張儀が築いたといわれるもの、「九日嚴大夫ニ寄セ奉ル」詩(第四冊一六五ページ)をみよ。○異楚蜀 楚は夔州をいい、蜀は成都をいう。○窅窅 おくふかいさま。以上ここにやって来たことの大体をのべる。○消中 病の名、消渴におなじ、多く食べれば数々小便する病という。○甘載来 甘はあまんじて、平気で。載来とは疾をのせてここにやって来たこと。一本に甘を甘に作る、甘載来ならば二十年以来の意、今は甘字に従う。○得無足 無の字を弱に作っている本があるというが、弱の字がまさっているものごとくである。弱足は脚力のよわったことをいう、「客居」詩(本書にはとらぬ)の「臥シテ愁ウ病脚ノ廢スルヲ」の病脚におなじ。○殊方鬼 異郷の死者。

○短 寿命のみじかくつまること。○老馬 自ずから比する。○望雲 北方の雲をしたってながめる。「胡馬北風ニ嘶ク」の意、古詩に「代馬朔雲ヲ思ウ」とある。○南雁 自ずから比する。○別家 家は故郷の家をいう。○筋力 筋力の衰えたことをいう。以上は客堂のたびごころをのべる。○序節 四季の順序、節候。○具物 すべてのもの。○羈束 旅の束縛。○蕨 ぜんまい。○蘆笋 あしの芽。○巴鶯 巴地のうぐいす、巴は夔州をさす。○徼麥 辺地のむぎ。○悠悠 はるかなさま。○漠漠 ひろいさま。○春辞木 春色が樹木から去る。以上は客堂の時候のさまをのべる。○台郎 尚書省の郎官のこと、竜朔二年に尚書省を改めて中台となし、後また尚書省となした、またの名を省台ともいう、ここに台郎というのは自己が工部員外郎となったことをいう。○已極 其の榮の極まることをいう。○声名人 名声の高かった人人。○埋没 官位を得ずうずもれてしまう。○居然 そのまま、これは次の幽独へかかる。○縮章紱 縮はまとう。章紱は礼服をいう、緋衣をさす。○幽独 幽静孤独。以上草屋までは成都の時の事をいう。○上公 上官にして公位にあるもの、鄭国公嚴武をいう。○記 旧交を記憶する。○累奏 しきりに朝廷へ奏聞する。○資 とる、もとでをとる。○薄祿

すこしの俸禄。上公二句は「憶昔」詩(第五冊一四四ページ)の「朝廷記識シテ禄秩セラルルコトヲ蒙ル」の意。  
 ○主憂 君主たる人がしんばいすること。「史記」(范雎伝)に、范雎のことばとして、「主憂ウレバ臣辱メラレ、主辱メラルレバ臣死ス」とある。○身遠 遠とは都よりとおくはなれてゐること。○曠職 職務をむなしくして仕事をせぬ。○修文 平和の徳をおさめること、君をいう。○廟算 朝廷のはかりごと、「孫子」のことば。○猷可 「左伝」(昭公二十年)に、「晏子曰ク、君可ト謂ウ所ニシテ否ナル有レバ、臣其ノ否ヲ猷ジテ以テ其ノ可ヲ成ス、君否ト謂ウ所ニシテ、可ナル有レバ、其ノ可ヲ猷ジテ以テ其ノ否ヲ成ス」とみえる。猷可とは君が否という所でも可なる所があれば可なる所を猷ずることをいう。○天衢 天上の路、有形の路と無形の道とかけで用いる。「易」(大畜卦)にみえることば。○趨 足をふんばってあるく。朝廷にあってのあるきつきをいう。○毫髮 すこしばかり。○裨 益す。○若是 衰えていることをいう。○行色 旅行の様子、もと形体的な様子。子をさす語であるがここは無形の情態のことに用いている。

おもうに自分は前に成都の少城から離れて今では蜀と楚と居場所がかわった。さて舟をすててあがってみるとまた深山であり、おくふかい一つの林麓の地に住むことになった。『雲安県にとまっていたときには消渴の病が内部で自分をひどくするしめたものだ。そのふるい疾を平気で船にのせてやってきたが、老衰になってまた足がきかなくなった。ここで死んで他郷の鬼となったとしても白髪あたまになったのだからわかじには免れたのだ。ただ北の馬は老いてもやっぱり北方の雲をながめる、雁は南に飛んでもここは北にあるので故郷は忘れがたい。故郷の家に別れてからこどもやむすめは生長したが、自分ははずかしながら起きあがるにも筋力が衰えてしまっ

た。』この寓居でも季候がかわり、旅の身のめのまえにさまざまの物がでてきた。ひなたの石が  
あたたかです。それにはぜんまいの芽が紫に生え、渚なみさには蘆あしの芽が緑に秀でてきた。鶯うぐいすはまだなかな  
かたくさん鳴いているし、さすが南境で麦は早く熟しかかっている。日の光は遙かに江上に動き、  
一帯にわたって春の色は樹木から去ろうとしている。』尚書省しょうしやうしやうの郎官ろうかんは本来才俊のものを選ぶの  
だ、それに自分が選ばれたことは自分としては榮譽の極みである。先輩で名声のあった人人で何  
の官にもならずそのまま埋もれた人は何を得たか、それに本性幽独を好む自分ごときものがあつ  
かましくもそのまま官の礼服を身につけておる。自分は幽独な性質ゆえふだん休息する土地には  
きつと幾本かの竹をうる、自分の仕事はにぎりぎけを飲むことであり、屋根をふいてかまえる  
家はただかやぶきときまっている。』さような自分を顯要の地位にいる人でおぼえていてくれた  
人があって自分のことについてしきりに天子に奏上して官を授けてくれたので自分はそのいささ  
かの俸禄ほうろくにたよっておるのである。今天子けんてんは国事について心配をなされておるが自分は時世を濟すく  
うこともできぬ。かく遠方とんぱうにいる身ではいよいよ職務を曠廢くわうはいしているのである。今や君は文徳を  
お修めになって廟堂びやうどうのはかりごと正しく、臣下は君に可なる所のものを献じて天上の道もまっす  
ぐにとおっている。それでもまだ自分は朝廷に趨進すうしんしてたとい髪けすじほどでもよいから天下社てんか  
稷しやくのために裨益ひえきしたいとおもうている。しかし自分のからだは今や見る所のごとくであるから、  
自分の進退はこれからの旅行の情態如何にまかせるよりほかにない。』